過去と現在、気持ちの違い

黎奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
過去と現在、気持ちの違い

【Ｎコード】
Ｎ０１４３Ｐ

【作者名】
黎奈

【あらすじ】
昔はこの人が好きだったーーーでも今はあることがきっかけでこの人が・・気になるのーー話したり、帰ったりするのはすごく楽しいーでもそれは恋??ねぇ、恋なの?誰かー教えてー!!
あなたにもそういうことはありませんか?
好きというのはどういうことなのか、一緒に考えてください。

今、私は中学二年生。

どこにでもいる普通の中学生、ただ・・人によって態度性格がまるで違うだけの中学生。

そんな私は今日も学校で普通に過ごしていた。

そしてたまに過去を振り返るときがある・・。

そう、とあることがあると思い出させずにはいられない過去が・・。

そのことに触れる前に一つ触れておかなければならない話がある、

それは・・幼稚園の頃からあこがれていた人の思い出だ。

幼稚園に入って小学二年生までずっと同じクラスだったあの男の子。

いつも私は眺めてた。話すときもあった。

恥ずかしさと緊張と喜びに溢れたときの会話は今でも時々懐かしむ。

恥ずかしい話でみっともない話だがそれは幼稚園のときの給食の時間だった。

私の好きな男の子は給食当番だった。

「これ残ったんだ。食べてよ」

「え～っ」

「いいじゃん、すこしぐらい」

「ん～」

「な？迷うくらいならいいだろ？」

「んっ、そこまで言うならいいよ、もらってあげる」

こんな短い会話ですらも、うっすら記憶に残っている。

他にもいろいろあった。

幼稚園のときに行った蜆塚公園。

あれはいまだに階段を下りて男の子の後姿を見ながら貝の飾ったものを見たときの事を。

中学一年のときにもそこへ行った。

そのとき、過去でのことが頭によみがえった。

あぁ、そういえばここを歩いたなー。

懐かしさと少しの寂しさを心に抱いた。

他にも奥山合宿での合宿。

あのときは男女ともども同じ部屋だった。
小さい順に並んで決めた場所。
私も背が高いほうだった、（今も）
男の子も背が高かった。（たぶん今も）
だから意外と近かった。
だから今もうっすら覚えてるのかもしれない。
そして、小学生に上がる。
小学一年生になって自分の町での子ども会に入る。
私の好きだった男の子とは違う町。
でも、今気になる子は同じ町。
町で同学年の子は私を入れて十人。
女子は私ともう一人の女の子の二人だけ。
あとの八人は男子。
登校時の班は違ったけど同じ町だからかしゃべったりはできるようになった。
そのときは友達という枠でしか意識してなかったんだけど・・。

まぁ、それもあって小学生であったときも仲良くやれたと思う。
私の好きだった男の子との思い出は他にもあった。
小学一年のときでとった全学年との写真撮影。
あのとき隣だったあの男の子がまさにあこがれてた人だった。
そのときの光景はいまだに目に浮かぶ。
そのほかにも、二年のとき
図工の時間、席は後ろのほうで一列に三人座りで私が隅、あの子も
反対の隅でいた。
今も昔も背が高かったことに好感は持てなかったが
このときだけは背が高かったことに感謝していた。
なぜなら・・背の小さい順に並んだ席順だったからだ。
隣でなかったことに少し悔しさもあったが・・。
で、ちょうど図工があったその日は私の隣の子は欠席した。
そして運がいいことに私の好きだったあの子は図工の教科書を忘れ
ていたのであった！
まさしくこの奇跡・・偶然が私にとっての幸福だった。
「みせて？」
「忘れたの？」

「そう、だからみせて」

「え、でも席遠いよ？」

「じゃあ、隣に俺が座るよ、ならいいだろ？」

「う、うん。じゃあ・・はい」

このおそらく話しただろう会話とあの人との距離感が今でも忘れられない。

言葉自体全部が全部あのときの言葉ではなかったかもしれない。

でも話の流れはこんな感じだった。

そして・・・二年のとき、

私にとって大きな出来事を起こすきっかけとなったことがあった。

まず・・

同じ町の同級生であり親友でもある子とはクラスが違った。

登校時は班登校だから人に困りはしないが下校には困った。

学校との距離も遠かったし方向も逆の人のほうが多かったこのときは今では信じられないが四年生のときまで男子と帰っていた。

一年二年・・この頃は男女仲良し、手をつないで帰ることも多々あったと思う。

男子と遊んだこともあると思う。

あのときの三人で一列のときに座っていたときについに席替えがやってきた。

このときだ、私を揺るがす大きなことへのきっかけがやってきたのは。

小さい順で席順を決めていたのに次は自由に決められるようになった。

これがきっかけの一番最初の小さい運命を動かす歯車。

そして私はあの子の隣になりたかった。

だから私はあの子の隣を選んだ。

あの子は一列で三人の隅を選んだ。

だから私はあの子の隣、つまり三人の中の真ん中を選んだのだ。

そして・・私の空いてる隣を選んだのが・・私の気になる人になったのだ。

他の席も空いているのにどうして・・そんな疑問が幼かった私にも浮かんだ。

そして、その日の帰り道、その子と帰った。

その子との分かれ道が来たところで私は聞いてしまった。

「どうして私の隣を選んだの？」

たぶんそう聞いたと思う。

「それは・・」

その子は戸惑ったけど・・

「ーーが好きだから・・」

と、言った。

「ーーーーーー」

本当にうっすらとしか記憶に残っていないけど

『好きだから』

という、『好き』が心に残った。

そのあと私はたぶんこう答えたであろう。

「・・・好きな人がいるから・・」

おそらくそれに近い言葉を言ったと思う、

あるいはモット彼を傷つけるような言葉を言ってしまったのかもしれない。

そのあと、私とその子はそれぞれ家に帰った。

そのときは実感がなくそのまま親に言ってしまった。

「告白されたんだよ」

たぶん母はそういったと思う。

今も母はそのことを覚えてるらしい。

私はそのことを一度聞いたことがある、

「ほんとに言ったっけ？」

「言ったよ、覚えてないの？ちゃんと好きな人がいるって答えたって言ったことを」

親はこういうことがだいすきで今も何かあるとすぐからかってくる。

その後・・学校では何も気まずい空気にはならなかったと思う。

今でも気まずいというかむしろ明るく楽しくしゃべっているから。

あのとき・・彼がどう思ったのか？

・・彼は今私をどう思っているのだろうか？

あのときのことにショックを受けて他の人を好きになってしまったのだろうか？

それを知るすべは私にはない。

それを知る資格もないと思う。

そういうことがあったのに小六までは好きだった人を目で追ったりしてた。
告白してくれた子も多少意識はしていたけれどそれ以上でも以下でもなかった、そのときは。
今でも好きだった人を思い出すときがある。
でも、今はそのときほど好きではない・・もう恋愛感情はないに等しいだろう。
中学に入って好きだった人は違う中学へ行ってしまった。
だからもうその人を追う感情はなくなったのかもしれない。
そして、中学に入り親は塾に入れといった。
塾・・。私は知らない人たちの中で授業を受けるのは嫌だった。
だから・・個別授業の塾にしてもらった。
そこで入る前に無料体験学習をした。
そう、塾がきっかけだった。
告白してくれたあの子を小学生のとき以上に意識し始めるようになったのは。
あの子も同じ塾だったのだ。
無料体験中、その子に会った。
正直言うとちょっと内心焦った。

知らない人の中でやるのもいやだけど
知り合いがたくさんいるところでやるのもいやだったからだ。

でも・・・。

でも、なぜかその子と一緒にいたいと感じた。
最初は告白からの意識がそうさせたんだと思う。

私は一発でその塾に決めた。

個別授業といっても一人の先生が三人の生徒に教える形で、
曜日や時間帯も決めれるようになっていて

私は週に二日行くことにした。

偶然、その子も週の二日・・その、どの曜日も私と同じ曜日で時間帯も一緒だった。

そして、塾まで近いからと私は自転車で行くようになった。
すると当然帰りも自転車である。

同じ時間帯で教わる先生が同じとき、
そのときの三人はきまって同じ町の三人だった。

そのうちの一人は私の気になる子だった。

その子も家が近いから自転車で来てて帰りも自転車だった。

1、一緒に授業を受ける（個別だけど席は隣の隣）

2、終わる時間帯が一緒
3、二人とも自転車で来ている
この三つの条件がそろえば大方予想はつくかもしれない。
1、2、3、＝　一緒に帰れる
で、ある。
そして私とその子は自転車で帰れるようになった。
授業を受けるのも一緒でたくさん話したりするのがすごく楽しかった。
その会って帰る曜日が私の楽しみの一つといつしかなっていった。
その頃からだった、楽しすぎて、会いすぎて、どんどん気なり始めて初恋のように目で追うようになっていったのは。
でも、あの子の都合で一つの曜日は変わってしまった。
そのことにも悲しくはなったが、今は週に一回でも満足はしている。
それはなぜかって？・・・それは・・
それは・・・彼の部活での姿をみているからだ。
私は文化部で彼は運動部。
部活は違えど部活の合間に私は上から見ることが可能だった。

その姿を見るたびに自分も頑張らなくちゃと思えてくる。

そう、そのこともあって彼への気持ちは増していった。

彼といると楽しいって思えるのは恋ですか？

そう問いたくなる。

そういう楽しい、モットしゃべりたい、こんな気持ちが増えていった。

私は先輩に誘われて部活に入った。

行くときも帰るときも学年は違えど一緒だった。

でも先輩が引退した二年生の今、帰りは一人である。

そして真っ暗な暗闇の中私は帰っていた。

そして一台の車が通り過ぎると思いきや・・・その車は止まった。

「ーーちゃん？」

「えっ」

その声に聞き覚えがあった。

すぐに誰かと見当がついた。

気になる彼の母親だ。

「わたしーーですけど、ーーーちゃんだよね？」

「はい・・。・・・？」

「よかったら乗ってく？」

「えっいいんですか？」

その子の母親は私とも面識があった。

「うん、のってって。席は・・」

彼の母親は一度後ろを向いた。

ドキッ・・ドッドッッ

心臓の音が大きく私に響いた気がした。そこには・・・

案の定、彼は後ろの席にいる。

「席は・・前に乗って」

「はい、ありがとうございます。」

何故か私はほっとした。

隣だったらそれこそ心臓がバクバクするに決まってる。

そして私は彼のいる車で送ってもらったのだった。

その車の中では・・・

「ーーーちゃん、かえるの遅かったね、
同じ部活の・・同じ町の男の子もさっき帰ってたけど・・」

「ーーーくん・・ですか？」

「うん、そうそう。
ーー部はいつおわってるの？」

「えーと、ーー時ぐらいに片付けて・・それからですかね」

「へぇー、おそいんだね。
あ、そういえばテストはかえってきた？」

「あ、まだーーとーーーとーーしかかえってきてないですね」

「ーーは？」

彼の母は彼に聞いた。

「ーーはかえってきた」

彼は答えた。

「私はまだかえってきてないかな」

私は答えた。

「へぇー、一一ちゃんはどのくらい勉強してるの？」

彼の母が私に聞いてきた。

「えーと、普段はあんまり、・・でもテスト期間中は一二時間ぐらいですかね」

私はそう答えた。

今回のテストは結構勉強したからだ。

「一一一は漫画ばっかりだよね、メジャーで埋め尽くされてるし」

彼の母は彼にも言った。

「そうそう」

彼は頷いた。

「あ、私、テレビで見てた」

私もそこでいった。

見てたのは本当のこと。

「今は漫画だよね」

「そう」

彼の母と彼。

「それに勉強してるといつの間にか寝てるよね」

彼の母

「そう、寝ちゃうんだよ」

と、彼が。

「〜〜〜」

私は苦笑い。

机で突っ伏して寝たことは私にはない。

学校では・・寝そうだけど。

「私も漫画とかゲームとかついしちゃいます」

私は言った。

「え、でもしかられないでしょう？」

「そんなことないですよ、時々しかられます。」

私は自嘲気味に笑って言った。

その後も車は走って・・そして着いた。

「じゃあ、ーーちゃん、部活頑張ってね」

「はい、ありがとうございました」
彼の母にお礼を言って車から出る。
モット話していたいという気持ちはとりあえず抑えて。
そして車を見送る。
このとき私はたぶん顔が赤かった。
その後も母に気づかれないようにしながらもにやけてた。
テスト以外にもうれしいことがあったなんて親にいえない。
ちょうど車を降りたと祖父がいたけど、そこは
「友達が帰ってる途中に見つけてくれてのけてってもらった」
と、言っといた。
彼の名を伏せときながら。
小学校のときとは違い、もう親には伝えることができなかった。
あの事を覚えている母はきっとどうだったとか聞いてくるに違いなかったからだ。
私は自分で自分を抑えられない。
冷静でいられないのだ。

この前もそうだった。

ネット仲間がいてその人のことを話してた。

「お母さんはメル友から進展したんだよね？」

「そうだよ。なに、きになるの？」

「べつに、ただ、ネット仲間がいるから最初は興味からかなって」

「ふーん？・・・なに、好きな人なの？」

「ちっ・・違うよっ、別にキニナル人がいるもんっ」

私は顔が赤くなっているのが自分にも分かった。

ネット仲間自体好きだけど、恋愛対象ではない。

憧れとか頼りがいがあるとは思うけど、恋しているわけじゃなかった。

世の中にはいろいろな『好き』があるからね。

「えっ、だれ？・・顔、赤くなってるよ？」

「ッ～～～～！！」

ますます顔が赤くなる。

自分が止められなくなった。

そういうことってよくある。

なんでもかんでも親は鋭いなって思う。

まぁ、私の母はからかったりするのが好きな悪魔みたいなもんだから

よけい、一緒に帰ってるとかいえない。

このまえ、通学路で同じ中学の制服を着た男女が一緒に帰ってた。

すごいな・・堂々としてて・・・

はじめは驚きからだった。

そして・・

・・怖くないのかな?・・周囲に知られてやりにくくなるのが・・

という疑問もあった。

周囲というのは人を冷やかしたりからかったりするのが好きな集団

が多い。

私はそういう集団で冷やかしたりするのは好きじゃない。

集団ってのが嫌だった。

もともと大勢の友人を持たない主義だ、だから余計好きじゃなかっ

た。

数人で頼れて信頼のおける人がいれば十分だった。
だから人によって無口になったりおしゃべりになったりする。
どっちが私かと聞かれたならおそらくおしゃべりなほうだろう。
学校でももしかしたら家でも少しは自分を偽って過ごしているのかもしれない。
家でも言われたことがある、
近くで話してるの声を大きくするのか？と。
おかしいんじゃないか？と。
親にしてはひどい言いようかもしれないが、これが私である。
親の疑問で自分が自分をいつの間にか抑えてることが判明した。
そしてそれと同時に本当の自分を出しているのは
塾が同じで知り合いで話していて楽しくて仕方のない人たちと
信頼のおける友人とネット仲間とたまに親ぐらいなもんだったということが。
人って気持ちがすぐ変わっちゃうんだなぁーと今までを振り返ってよく分かった。
だから私が今どう思っていても

相手だって過去のことがあるからどうも思わなかったかもしれない。
そういうこともあって、私は何もいえないでいる。
中学生男女二人が堂々と歩いているように
私も周囲に怯えず前に進みたい。
あの時、自分がすごくうれしかったこと、傷つけて申し訳ないという後悔と
今よりも前に進みたいという気持ちと
今の楽しさが壊れてしまうのではないかと、恐怖という矛盾した気持ち。
それが板ばさみになってしまっていて何もできない私だけど、でも
今の気持ちはきっと、その人が傍にいる限り、変わらないだろう。
親にはいえないでいるけれど。

（後書き）

実話を元にしています。
好きってどういうことなのか？
自分の意思がわかっても
相手がどう思っているか分からないから何もできないでいる・・
そんなことってありますか？
少なくとも私はたくさん今までにありました。
そして考えていただけましたか？
自分と重ねてみてくれるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0143p/

過去と現在、気持ちの違い

2010年11月20日02時35分発行